

〔翻 訳〕

ジョリー・グラハム詩集全訳 (3)

〔訳〕古 口 博 之

1. *Hybrids of Plants and of Ghosts* (1980)
part I, II …… (以上 45 卷 1・2 号)
part III, IV …… (以上前号)
2. *Erosion* (1983)
part I …… (以上本号)
3. *The End of Beauty* (1987)
4. *Region of Unlikeness* (1991)
5. *Materialism* (1993)
6. *The Errancy* (1997)
7. *Swarm* (2000)
8. *Never* (2002)
9. *Overload* (2005)
10. *Sea Change* (2008)

2. 『侵 蝕』 (*Erosion*)

For Jim
(ジムに)

Jorie Graham, *Erosion*. New Jersey: Princeton UP, 1983.

目 次

I

サンセボルクロ
霞
プラトンを読む
シロッコ
肉体と魂の結合関係
理性の時代
アッシジの聖チアラの掘り出された身体に
ベリーマンにとっての形式について
ロングアイランドのユダヤ人老人ホームにて
盲目となる友に
悲 劇
子を欲すること

わたしの庭、わたしの日光
窓と魚との静かな生活
わたしは蛇を見た
酢の母
女性とユニコーンと他のタペストリー
着 物

II

鮭
忍 耐
生きるとは
水 仙
ジョン・キーツに
スペイン柳のキバチ
侵 蝕
愛
グスタフ・クリムトの二つの絵
歴 史
マザッチオの追放
上昇気流
不均衡について
ルカ・シニョレリの肉体の復活に
終わりの感覚は

I

サンセボルクロ〔訳注〕

この青い光のなか
わたしはあなたをそこへ連れ出す、
雪はわたしを
スカスカの
骨の世界にしてしまった。これは

わたしの家だ、
エトルリアの壁は わたしの
部分で、わたしの隣人の
檸檬の木があり、ちょうど
低い教会の下には、
飛行機の工場がある。
雄鶏は

一日中
壁の外の霽から鳴く。
空気にはミルクがあり、
脂ぎった檸檬の肌には
氷がある。なんと心は
清潔なことか、

聖なる墓よ。ピエロ・デラ・フランチェスカ〔訳注〕
が
描いたのは
この乙女で、
青い服の、
天空のマントを、
脱ぎ

出産に向かう。来なさい、わたし達はなかに入れ
るのだ。

時は
神が生まれる前なのだ。誰も
まだ
博物館や、
——肉体と
翼の——組み立てのラインや
露天市場には
起き出して来てはいない。
これは
生者のすることなのだ：なかに入りなさい。
長い道なのだ。
そして 服は
永遠から

私生活へと開き続け、息衝いている。
内部の、心臓のところでは、

悲劇があり、現在の瞬間は
永遠に死産する、
だが内部では、どの呼吸も
一つのボタンとなり

はずれかかり、
ひどく鋭敏な指のようなもので
止まるべきところを探しているのだ。

〔訳注〕 サンセポルクロは、イタリア中部トスカナ
の町の名。ピエロ・デラ・フランチェスカ（1412?-
1492）は、初期ルネッサンスのイタリアの画家。

霞

ただ知だけのこの鋭敏な知性は
困惑し、盲目的に
鼻のように出しやばり、
いつまでも違いを指でいじろうとしている：バラ
の
なかに咲くバラ、
霞のなかに
咲くバラ、
その地理は

その歴史よりも
もっと鋭敏なのだ。
わたしはそのなかに生き、それはわたしのなかに
生きる、売春婦となり、相続人となり、
わたしはそれがなすであろうところのものなの
だ…。
そして これはその海岸線なのだ：大陸と、全体
の概念、
ごつごつした岩の縁であり
泡になっていて、

空は毎日我々を釣り上げようと低くたれこめてい
る。

晴れるはずだ、人は言う、
だが それが
骨のような岩を食べ、

その霧の肉はすべてのものを
それ自身のものとするのを見たまえ

ついには 思考し
再考をして、
わたしは最小のものを食べた魚を食べた魚となる
のだ；
ひとつの世界を耳をとぎしながら泳ぎ、モーター
にさようならと、手を振り
自分自身泳ぐのも聞こえず、
水の中のうなる音も聞こえない魚だ；
この別な世界を
開き続けるバラのなかのバラとして泳ぐのだ；そ
して そのとき
この別な世界においてこそ
それは完璧なバラとなる
なぜなら わたしは
それを空から折り取るから、

なぜなら より厚い種類の、もう一つの視界を
わたしは望むから。

プラトンを読む

これは美しい
嘘の
話で、わたしの指や、
あなたの指を、
滑り落ちるものだ。時は冬で、
人の

生涯の
遠くにある。
帽子を被らず、土に汚れた
シャツを着て、
言葉もなく、わたしの友は
彼の趣味である

ルアーを作っている。毛針は
とても小さく

彼はピンセットと
虫眼鏡で仕事をしている。
それらはとても
似ているもので

本物のようだ——触覚や、
アンテナは、
素早く 慌てていて
何か溺れるものようだ。
彼の心臓は
彼の手の中で

激しく鼓動している。それは
ほかのものが見えなくなるほどで
小さな庭にいる彼を
誰が許すというのか。
彼はそれらを
毛すなわち、

鹿の毛で作る、というのも
空洞があり 浮くからだ。
死を越え、視界を越える、
これが
彼の良き考えであり、
おろかな日々を

駆り立てるものだ。記憶よりも良いのだ。愛よりも
も
良いのだ。
そして 出来上がれば、対になった羽根の
下には針がつけられ、
春には、
男達が

夜明けの川床に
入っていくのだ。上空には、
星がまだ腹をすかせた動物たちを
繋ぎ描いている。
じきに彼らは満足し
立ち去るだろう。そのあいだ

上流でも、下流でも、想像してごらん、

空気のなか、
肉体をおどらせ、毛針の
青い群れのなか、
わたし達だけが知っている
優美な

鹿が軽々と水面を
跳んで横切るのだ。
肉体をばらばらにされながらも、思い起こされ、
それはついには
生きるのだ。
いちどにそれらが

部分となった肉体を
想像してごらん、
男たちは
青々と繁った緑の土手沿いに
自然の世界に
滑り

入ろうとしているのだ。

シ ロ ッ コ

ローマの、スパーニャ広場
26番地の、
長い一続きの階段の
下のところに、
キーツが借りた
部屋があり

1820年に、
そこで彼は死んだ。いまでは
そこを訪れることができ、
小さなテラスと
寝室が見える。紙くずが
あり

彼が書き損じた
ものらしく
ガラス越しに、

あるものは黄色くなり、
あるものはコピーされて
あるいは謄写版印刷されている…。

窓の外では
シロッコが
見えないものを
動かしている。
鳶のどの乾いた葉も
指でいじられ、

まさぐられている。
すでに知っていることを
何度も繰り返さねばならない
この世界の
神経質な精神とは誰のことが、
わたし達を通り、

わたし達により、
答えを探している
とても熱くて乾いた
ものとは何なのか。
テラスの上の
木陰には

むき出しの古代ギリシア風の
形をした
葡萄ができていた。
それらは柔らかくなり
衰えてようやく
わたし達の世界に入ってきて、

美から
真へと
すべもなく
変わってゆく…。
精神が何であれ、
熟しゆく葡萄は

それが見えるものの一部であり、
別の世界の
キーツの

このマスクを作った
ゆるやかな手も、
記念館の

管理人であり、
陰の下の、
ポーチに座り
ヒヨコマメを
石から選り分けている
老婆もしかり

鑄鉄製の
壺に入れている。
彼女の手が
何を知っているのかごらん——
それらはその息であり、
その母

語であり、分けたり、
捨てたりしている。
木の葉の上と
彼女の顔には
光がたわむれ、
彼女を

抽象的に、
生き生きと
不思議なものにしている。しかし 彼女は
自分をまだらにして、
変化させているものに
まったく関心がない、

彼女は仕事に
夢中なのだ。ああ なんとわたし達は
受け入れられ
変えられ、
自らが入ろうとするものに
修正されたがるのか。

世界は
このようなものなのか。
世界はわたし達に

それを直して欲しいのか、
光と闇、
緑と

肉体。それは
そのとき自由になるのだろうか。
わたしは世界とは
一つの絶望的
要素であると思う。世界はわたし達に自らを
鎮めさせ、

それを受け取らせるだろう。だから これが
あなたに
想像してほしいと
頼みたいことなのだ：すなわち風だ；
風が
止む

瞬間だ；そして 葡萄だ、
無であり、
手の中で
壊れゆくものだ。

肉体と魂の結合関係

1.

ついにわたしは
音楽のなかに、
すなわち、喜びであり、
ほかに住処のない
奇跡のアメンボのように
自身を
浮かせる
表面張力を
越えて聞いたのだ。
かなり深く
聞いたということではなく、
一つの深淵を、
そこを通り落ちてゆく

一つの空間を、
一つの木霊の響きを、
意味を 聞いたのだ。
— 小さな、宝石のちりばめられた、深い水の —
輝き。わたしは

ピアノの協奏曲に
単一の楽器と
全体の
共和国との間の違いを聞き、
それぞれが
運命と、

自由意志のもとにできた議論を聞いた。
そして ピアノの
独奏を、
金の鉤の上で
棒の先が
もがき

奮闘するのを聞いた。

2.

1967年、冬のこと
アルノ川の
泥のなかから
わたし達は 10世紀の
修道院の
僧達により

金で彩飾された
文書を取り出した。
ときどき金の文字は
泥のなかと、
手のなかで崩れた。
わたし達は

精巧な金の外枠と、
新約の受胎告知と、
燭台を見つけた。
川岸沿いの

泥が氷になったところは
日の光を浴び
輝いていた。
水流の
渦、ねじれ、バロック調のこぶや、
時の
流れの
すべての障害は

みずみずしい茶色のなかに
閉じ込められ
わたし達は
盲目的に
遺物を探したのだ。時は
ほとんど春で、

わたし達は難儀しながら進み、
教会の
鐘が
小さな
警告を
発していた。自分もまた、

救済の
一つの行為であり
肉体が甦り、
精神が
開放されたのだ…。

3.

上流では川は
より小さく、
ほとんどが静かになっている。
暖かい日には
水面の静穏は
宝石と、

小さな虫の
命を保っている。
静かにアメンボは

意味をもとめ
波紋を測っている。
それらは

ちょうど水面に
たまたま触れた
蜂を捕まえる。静かに
アメンボと
マツモムシは
(水面下の

鏡像のようであり、おたがい
水膜に向かい
腹部を見せている)
繊細な金の蜂を
分かち合う。それらは両方も、
簡単に、

満足するのだ。それらは食べる。
太陽は輝く。
沈黙のなか、交尾するアメンボは
金の卵を作り
それらを鳥たちが落とした
羽根や

鳥の尾の下側のところに
鳥が目を覚まし
飛び立たないうちに
産み付けるのだ、そして鳥は
それ自身何も気づかない
自由への

青く白い案内者となるのだ。

理性の時代

1.

春の野生の緑のなか
その物憂い鳥は
蟻浴びをしている、つまり、
わたしの果樹園で

彼は怒り猛った
蟻塚の上に

翼を広げ
マルロメ色の黄色の
羽の繊細な背のところに
たくさんの小さな、怒った
生き物を
取り入れようとするのだ。

蟻は彼につき、
あからさまに困惑し、
大気のなか深く
この羽の惑星の
新しい命に乗り、
旅をするのだ...

鳥たちがどうしてそんなことをするのか
わからない。
時々彼らは
燃えるものならなんでも
その上に乗る、
石炭や、シガレットの

燃えさしや、
さらに間違っ、
壊れたコップの破片の上に
翼を広げるのだ。
その間 光は
それが愛であるかのように

彼らをなで続ける。庭は
彼らの周りで
その仕事を続け、
死を表すものが
しだいに広がる。プラスチック製の
下生えの下に 人間の

庭が育っている：支え棒と
結びが、
列になっている。誰が
自身のなかに

肉体のなか
何か燃えるものとか
傷つけるものとか、

失くし^{さまよ}彷徨っているものを
取り込みたくないと思うだろうか。

2.

ヴェルナー・ヘルツォーク^[訳注]の
「ヴォイツェク」の
最後のところで、
愛すべき
気狂いの主人公が
世界である、

彼の若い
妻を
殺し、
愛し、
血を
浴びたときに、

彼は彼女が
なんと速く柔らかくなり
土の形になるのかを見て
恐ろしくなる。
月明かりのなか 彼は
ナイフを

側を流れている
広い川に投げ込むが
それが深いところまで
沈まなかったと思い
それを探しに
自分で

飛び込むのだ。ナイフのように白く、
彼はそれを探して
全身で飛び込むのだ。木々は緑色。
地面は
緑色。光は

緑色で

病んでいる。彼が
いなくなってしまうと
女は
緑色のなかで
小さな裂け目となった。翌日、
緩やかな

動作で、葬儀屋と
哲学者達が
(理性の
時代なのだ)
凶器を
探して

背の高い
光沢のある
羊歯と草の間を^{さまよ}彷徨っている。 春のことだ。
空気は
金色となっている。時々
彼らは

しつらえたシートを持ち上げ
死がどんなものか
見ようとしている。彼らは
非常に注意深く、
一日かけて
仕事をしている。

3.

どこまでが
真実といえるのか。
視野はどこまで
この世界に
入ることができ
いまだに

愛だといえることができるのか。
拒み、
風だけが

もとにもどせる
物のありのままの姿が、
真実の天候ではないのか、

君の部位を教えてくれ
そうすれば
君の身体や
君の話を
理解できるだろうと
欲望は嘔くのではないか。

こういうわけで
この水流を
渡るといふ
構想に
人物と
ナイフがいるのだ。今や

果樹園では
続けざまに
花が咲いている。
柔らかな
芝草がある。十分な
深さはない。

自分の内部に
取り込みたいと
思うものは、果樹園全部、
色、
名前、匂い、象徴、
生のみまで青白い

花や、濡れて黒い
腕など
十分な深さはないのだ。

[訳注] ヴェルナー・ヘルツォーク (1942-) は、
ドイツの映画監督。

アッシジの聖チアラの 掘り出された身体に

さあ あなたはここにいる、明暗の女王、わたし
達を
返し縫いする黒い少女。無傷のまま甦り
あなたは何を直すというのか。わたし達に
見て欲しいものは

とてもゆがんだものなのか。わたし達はここに、
あなたの死床のところに、一時的にいるのだ。不
純で時に喜ばしい
もとはもどせないわたし達の進歩の上の空は
青い。わたしが彼から立ち去るかどうかや、

神話や、絶滅収容所や、目に追えないほど速く
レースを作る
ブルーナの手の上にある空は、青い。
金の縁取りの黒い服を着て仰向けになっている
あの世の体の上の青空は

慣れないわたし達を眺めている。
あたかも肉体がともかく永遠の部分であるかのよ
うに、
さあ それはここに、率直で純粹なものとしてあ
り、
600年間の、1トンにもなる塵をかぶり

人間の心のなかの象徴として
あなたは成ったのだ。あたかもこれが常に
肉体が変化してゆくものであるかのようで：さら
に肉体ができてくる。
動作の下では さらに肉体があり、

日光と腐敗と法則のもとでは…。 それは本当
なのだろうか。
夜の風はオリーブの木をしないで和らげ
見えるものはそれらがちょうどその時
あったところで、

それをオリーブの木と呼んでいたのだ。わたしは

その愛に触れる。その深い遅延。21歳になるまでに
あなたは誰彼を愛し、誰彼から去り、それを
信仰と呼び、

黒い服に身をつつみ、顔に黒いヴェールをする
尼僧の戒律をうち立てたのだ。わたし達からそ
のヴェールを隠さないようにするために。そ
して見られるように。
わたしは今あなたの不在に寄り掛かる。

ベリーマンにとっての形式について

(1月7日, 1982年)

1.

そして この記念日は、あなたにとって、何を意
味するのだろう。
前後にあなたは激しく揺れ動き、前にだけ恐ろし
いほど
あなたはのろのろ進んだのだ。引っ張られればと
あなたは思うほどだった。外形や、
原理によったとしても。ああ、それでこの、10
年間で、あなたのすべての
韻文となったのだ。それは今やあなたなのであ
り、ぼんやりと息もしない。

記念日とは、

混乱という外形から
抜け出せないものとしてあるのだ。その美しい
骨。
まさに最初から見えないものとあなたが交わす握
手。
それは約束を守る。そして それは あなたが約
束したものは何か
考えようとしてあなたをせき立てる、
それで、あなたには何の借りがあるのか。
他に何もなければ、

次のことがまさに計画とならねばならない：借り
を、途方も無い借りを考え、
高く上げ 打ちつけ、

蓄え、許し、一晚中何か与えようと待つのだ。
見慣れたものを待つことで
一句一句にあなたを見つけ、
あなたの苦しみや偽りや情感や、
あなたの惨めな甘美な嘆願を見て、
あなたが証明を求めて萎えた腕を差し出している
ところを下って行くのだ、

2.

ということは あなたはある種の支払うべき返済
ということなのだ。

全額。階下の男は
トランペットで音階の練習をしている
かれは仕事を得たのだ：きっちり払い戻すのだ、
習いたての鋭い音で支払うのだ
そして 習わないきれいな音でならば、
ねじれた歌に飛び込むことになるのだ。
公園の男は
今朝早く娘をブランコにのせ押している、
彼は自由になりたがっている、
彼は何かを所有したがついて、
彼はまるでこの光に訊ねるのに
より良い質問であるかのように彼女を押すのだ、
彼はたわむれの遊園地に

わたしの肉の肉というあり得ぬ
言葉を押すのだ。彼は
何かのために ほとんどすべてをあきらめようと
する愛が
何のためにあるのかを知りたがっている。彼らの
せいでブランコは震えている。
彼のせいなのだ、彼はある事を憎むとすれば
十分深く憎まなくてはならないことを知ってい
る。
彼は彼女を

無関係と思える太陽へ押し上げ、
愚鈍な成長の果実である、彼女の美しくきれいで
役に立たない髪の毛を
今や空高く押し上げている、そして、それが何の
ためにあるのか自問するのだ、

彼をあざけるようなこの光の輝きや、
この非情な来世や、髪のコヤ、太陽が
自らを知るといふ
歴史の残骸が何のためにあるのか 自問するの
だ。

ロングアイランドの
ユダヤ人老人ホームにて

これはあなたが
看護婦から
盗んでいる砂糖で、
枕を
役に立たない
ものでいっぱいにし、
わたしのポケットも満ちし
わたしをある種の
眠りの精霊のごとく
まだ遣わすことのできる
もののように扱うのだ。夢と
言えば、
あなたの頭は
白い灰のなかでサラサラ音を立てていて、
誰が夢を必要としているというのか。
あなたが愛しているのは
この世界で、
盗みが可能な
唯一の場所だ。
今日は
あなたの防風窓の外には
霧がかかっている。
木々はかすみ、
それから
完全に消え、
それからこの世界が
それらを通して
発展するときに
またこの世界にしみをつける。
今、

どの窓からも
わたしは自由について
学べる、どんな木の
筋肉質な傾きからも、
太陽の光と、
道にある壁の
運命からも。
外のそこには、
手品のような
深みのところに

あなたが
わたしの母を
筆箱を盗んだということ
彼女を死ぬほど
鞭うった
ときがある。そして一度も
髪のコを切ったことのない
母の妹がいて、
冷凍庫を
20年かそれ以上

古い食事でいっぱいにしたまま
死んでしまった。おそらく
それは真実なのだろう、おそらく
詮索するほどのことも
ないことなのだろう。でも一度、
わたしがとても小さいとき、
あなたはわたしを
ちいさな果樹園に
連れて戻り わたしが
飽きるまで
実を取らせてくれた。

あなたはどうやって
木だけが
もとの岩の鉱物を
吸収し(樹液と
葉から)
それらを
(腐った葉で)

土に返すかを教えてくれた。
なんとそのゆっくりした時が（あなたは
土に

泉を描いてくれた）まさに
わたし達であることか。

とにかく

誰が施し物などいるか、
とあなたは言う。家族の時間は
ほとんど無くなっている。
そこからわたしは
一つの枝を
取ってきて仕舞ってある：それは
ちょうど走っている女の人のような形をしてい
て、

一つ上げた腿が

風に

なでられ、髪の毛は（実際
海岸線のようにであり
そこでは枝は
ほとんどばらばらになり）ほつれている。
彼女は何でも
追い抜けるようだ、
しかし もちろん
彼女は永遠に

この記憶のなかに、

記憶が心に呼び覚ます
神話のなかに囚われているのだ、

そして 何かの神の

狭い喉のように

あるいは 切り裂いて彼女を自由には
できない心のように

そこにいまでも立っている

半ば記憶にある木から

盗まれた

この遅ればせな解釈に

囚われているのだ。

盲目となる友に

今日は、近道が見つからなかったので、

わたしはこの町の全部の内周を歩き

中世の壁が

18世紀のアーチに

変わるところを見つけようとした。

黄色い谷は

割れ目や銃眼から

ついたり消えたりして点滅していた。

ブルーナは布の模様の切り方を

わたしに教えてくれている。

土曜日に わたしたちは生地を買う。

彼女はそれがまるで良い考えでもあるかのように

手に取り、織地や、布目や、作り付けの

端をさわったりする。思いついたかのように彼女

は尋ねるのだ

で、あなたはそれが綺麗だと思うの？

彼女の巻尺は、トウモロコシの金の色をして際限

もなく、

首から垂れ下がっている。

彼女を見ると

わたしはラプンツェル^[訳注]を思う、

どうやってあの丈と、

あの愛を登れるのかと。しかし わたしは言うの

だった、

わたしは壁の連なる路に沿って彷徨って、

布の上に浮く

針のようだったと。一度

わたしは目を閉じ

石に沿って路を進んだ。外には

見渡す限り、お金に替えられる作物や、ヒマワリ

があった。聞いてごらん、

風がそれらのなかで鳴っていて、

解き放たれた崇拜は

中断となる

対象を求めている。サラよ、

壁は美しい。それらは景色を遮る。

そして それらの内にいることは

豊かな気持ちになれるのだ。

ブルーナが服を仕上げる時

それは彼女を助けてくれる
形になっている。彼女はそれを着るのだ。

[訳注] ラプンツェルは、髪の長い少女についての
古い童話

悲 劇

わたしの隣人の庭で少年達は
中くらいの王国を作っている。彼らはボール取り
を
しているのだ。ボールを持っている少年は
運を試している。わたしは麻布を通して彼らを見
ている：
わたしの窓枠だ；そこここにはようやく実がなり
だした
モチノキが一行あって
錬金術の若い
樅の木がある。ここから見ると
ゲームは枝の間で
行われているように見える——どの子も木に入
り、
手ぶらで出てくる。芝生の向こうでは、
目の高さに、
わたしの隣人が窓いすに腰掛けている。
彼女は少し向こうに振り向き、
針仕事に専念している。彼女の家の上では街がお
ぼろに積み重なっていて、
ありのままの姿を見せている。そして 霧が
降りてきて、その線条であたり一面
旗のようになり、溺れるほどだ。
時々ゲームは枠を越え
成されるのだろう。彼らが金切り声を立てている
のが聞こえる。その時
彼女とわたしは、お互いの隔たりのところで、
見えるものを支えるのだ。わたしたちは
空っぽの緑と
叫び声の織機なのだ。もちろん、わたし達がいる
ガラスのなかでは、ほとんど静かなのだが、
彼らの遊びの抽象性を わたし達は
肉付けするのだ。彼女は修繕に

時間がかかる。草だけが
伸びる。すべてのものが使われ
何にも変化しないときに勝てる
ということが説明されたのだった。

子を欲すること

川にとって ここでもた海に入ることはなんと大
変な
ことなのだろう、だがそれは、もちろん、
ほとんどもとの状態にされる時間の浪費のなかで
とても美しいものだ。それから
それは軀くびきに繋がれ、
括られる…。川は
あらゆるところにあり、想像してごらん、分割
し、見分け、
親なる岩に深く食い込み、
その土台を
洗い流してしまうのだ。
何物も元のような
状態ではない。何物も
言及されないものはない。
時々わたしは すべてのものを
一つにしてしまい、
心と身体が
混在する肉体であるところの
この光る、古代の海に指を浸すためだけに
家を出てここまで来るだろう。
カモメは、調子の悪い蝶番ちょうつがいのように
キーキー鳴き、浜辺には
貝殻が溜まっている。潮は
川の急速な論争のなか、内陸へと、
いつも入ろうとし、
その執拗な悲劇の波で脈打っている。
波は——わたしの本によれば、遠洋の大きな嵐の
生きている木霊であり、あまりに遠くて気にも留
めないほどであるが
波によりこの海岸へ
そのまま運ばれてきている、だから侵蝕が
その外観となっているのだ。

わたしの庭，わたしの日光

わたしの隣人はわたしに底魚を持ってきてくれる——
チゴダラ，メバルなど——
海の拳だ。彼はわたし達の家のあいだの
りんごの木から彼の土産を
きつく引き締めた糸巻きのように
持ってやってくる。

週に一度彼は獲ったばかりの獲物を，
骨を取り皮をはぎ
舌のように丸めて持ってくる。わたしはそれらを
凍らせる，
口をきかない，無垢な
楽器だ。わたしには聖歌隊をつくるほどある。
生きていれば，それらは

泥のなかに身体を，身体のなかに泥を泳がせ
えさをとるだろう。
なんと白くそれらはなったことか。ずっと上で
は，
水は青へと
薄まり，それから空気へと，そしてより少な
く...。
これらのものは

上のところで輝き，
永遠にぼんやりと通り過ぎ，水になろうとする
すばやい群れほどには素敵なものではない。
しかし これらのものはわたし達のものであり
わたし達は这个世界から落ちてでるわけにはいか
ず
そのなかへより深く

入っていき，わたし達の目の白さのなかに
それを押し込むのだ。濁った
日光と，わたし達は口に出して言い，そのなかで
溺れるのだ。
雨粒の間を跳ねることができれば
濡れたりはしない
と母の母は

言っていた。カノジョノ言葉はいま聞くことがで
きない。

わたしはここにあるものの間を
抜けていこうとする：チョーク，ユリ，ミルク，
チタン，雪——
わたしが言えることは
このりんごの花は

五色の白色をしていて，しかも
もっとあるようだ。
わたしの止めた息とその小さな熱い
死の間に，庭や，
白さが，成長するのだ。その氷の果実は
本物のようであり，
それは光り輝く。無料ですと彼は言うので
わたしは断れない。

窓と魚との静かな生活

今朝わたしの白い台所のここで
永遠に
そうでなければ
同じことを言うのだろう
細い体，
光の
やせた体に沿い，
美しい邪魔物，たとえば木々の枝，
電線，庇と生い茂る
枝など，この世の物たちは，
わたしの壁一面に燃える。
窓ガラスさえ豊かだ。
すべての外界が
ここに侵入しようとし，
部屋のより簡素な形に
くねって入り，
壁の
確かな調和にぶつかり
壊れそしてまた壊れる。
すべての外界は...

わたしはそれがより良いもので、全体的で、外的
 な、世界であるのを知っている——
 すべての木々、すべての森——しかし わたしが
 それを愛するのはここであり、それがぼんやり見
 え、何物も始まり
 終わることがなく、すべてが
 揺れ、色失せ、
 そして 声がないからだ…。
 ここにわたしの骨灰磁器の皿の海の上に
 魚の背骨がある。ここにわたしの手の海には魚の
 背骨があり、
 瞬き、そのすべての重さは
 なくなり、
 ここに動く理由が生まれ、
 台所の光に洗われ、扇ぎながら、小枝や
 外の小屋に立てかけてある
 熊手や、揺れる鳥かごや
 そのなかのいない鳥
 などの煙のなか上方へすべりゆく。
 もしわたしがあなたより
 早く死ねば、
 あなたはこの花の、特徴のない、
 いつまでも残る
 波のなかどこにでもわたしを見つけられる。
 わたしたちは
 この地球を
 受け継ぐには
 不安定すぎるのだ。

わたしは蛇を見た

家の後ろの
 乾いた草のなか懸命に
 蠅を捕まえようとしていた。それは
 姿を見せずにいた。
 わたしにはこれは何か
 欲望と

関係しているとわかっていたが、
 今日仕事と
 関連しているように思えた。

ほとんど半時間をかけ
 ほぼ10フィートの芝生を
 とてもゆっくりと横切った

葉の間にいても動くのが
 見えなかった。わたしは草のなかで
 その体が
 突然見えなくなり
 ちょっと先のところに
 また現れ

黒い頭をかかげ、目を
 蝶にすえているのを見たものだ。
 これは完璧な前進にちがいない
 動作はまるで
 消滅のように見え、
 不可視のものによる

可視の修復のようだ——ちょうどわたし達が
 地上を縫うように、
 わたしには思えるのだ、わたし達が
 死ぬたびに、
 下にもどり、上へともどる…。
 それは最も簡単な

裁縫であり、避けられぬものであり、
 自然と美しい文様を
 残すのだ。しかし 空腹により
 ——蠅、言葉——のような小さなものを
 狙うことは 体がそう
 求めるからだ。

そしてこの狼狽させるような生き物のなかで
 わずかな空腹が、
 タンポポをも押し付けられないような
 わずかなものが、
 房にちょうど停まった
 欠くべからざる蒼黒い

トンボを捕らえるのだ…
 こう言うのは
 今日わたしはそれらを恐れているのではなく、

もはや恐れることもないと思うからだ。
わたし達は今まで、
間違ったこともなく、今もそうだ。欲望は
体の、その原動力の、その風の、
素直な動きなのだ。
それも帆を持たねばならず——この小さな
口のなかの羽根、人間の心臓の
バルブ、心に
出航する帆船のような
意味を持たねばならない。情熱は
わたし達を、
失った裁縫を取り戻す作用がある。それはわたし
達の模様を作り、
わたし達をしっかりとより堅固なものへ
結びつける
それには疑いがない。

酔の母

容器に入れられた損傷は美へと変わるので、それ
は
樽の底の頭脳〔訳注〕のように、簡素な生き物の、
貝のなかの
砂のように光る。
永遠に続いてきた偉大なものがある、
誰にも触れられずしまわれてきた
甘い世界にある何か固有のすっぱさの記憶——
しかし 今わたし達が最も愛するのはこの味なの
だ、そのみずみずしい
正しさ。
ここにわたし達は
独立
宣言書と同じほど古い
ぼろを持っていて、
月に一度は光にかざし
酔漬けのうなぎが、
金色の文字を描くのを見るのだ。
長く保つには、わたしの書類は黙ったままで

いなければならず、赤色の大陸がそのゆるやかな
時を
水の激しく、より薄い
肉に吹き込み、そしてついには
それはなんでも直すことができるようになり、腹
に母を抱いた
この水は、わたし達の最も安い
材料であり、家庭の
川でもある。それは言う
分け隔てなくすべてを奪うものによって
わたし達は最もきれいになると——^{あざ}痣、悪夢、
リンレルにこぼしたコーヒーのしみ。
納屋の動物たちはそれで治り、窓や
植物や、
わたしの髪は
頭上の風に
月にある
わたし達の旗のように
輝いている。

〔訳注〕 2行目原文は a brain となっており、「頭脳」
と訳したが、a grain の誤植の可能性もある。

女性とユニコーンと 他のタペストリー

わたしに信念があるならそれはこのようなもの：
受け入れ、溶けないが、
溶けうるほどに支え持つ雰囲気のかなかの
このイメージの配列。
これなのだ：裏の野原の
雪のうえ
ウズラが自由に時計のように、東の間安全に走
る。
それらは一陣の風に、固く時間に関係なく飛び上
がり、
獲物として、場所におかれ、
善により、
構図の自らの役目により

瞬間的にある勝負に入るのだ。そしてそれらが、
まっすぐ、
雪に膨らんだ樅の木のあれこれの枝に止まる時、
それらは——身体が
翼のずっと下に落ちるので——
同じように落ちるように思え、

まったく不安定なものを重要なものと見えさせる
嘘のようだ——この上もなく白い嘘で、美…。
それらは降る雪のなか
昇ってゆき、
でもそれらを見ることは

それらの落下を見ることでもある…。 そし
て、おのおのが枝へ、
顔は灰褐色と藍色に帽子の下からやさしく覗き
糸や針が
そのままの恐怖を
手繰って引き寄せるとき、

木は熱心な目が地図をつくるような古きものとな
り——
陽気で復讐的で左右対称となる：そこで愛により
ウズラはタペストリーに
編まれ、カルダモンと松の実

そしてタイムの枝で剝製にされる。

着 物

少年が隠れている
常緑樹の
反対側にいる女
わたしは
谷を、晴れた空を、
雪解けの岸辺を身に着けている

水仙と空洞の葦が
突きぬけている。
それは彼にとっては世界を意味し、この平らな
古い生地は

どんな天候にも変わらない。
髪をとかし、

わたしが屈むたび、鳥が
空から落ちてきて
見えなくなる。
彼の姿はわたしには見えないと
彼は思っている、
7歳にもならないわたしの坊やは

息を凝らしている。
わたしの庭で、彼に見えるものは、
世の中の様式なのであり、
彼女が髪を
木々の枝が自然にくずれる以上に
永遠に梳くという

姿なのだ。
わたしは屈む
すると葦は突然
溪谷となる…。 なんと滑らかなのか、
この魅惑的な断絶は、この小さな
永遠の

わたし達の知覚であり、わたし達の肉である
間隔は。
屈みながら、わたしは思う、
なんとのおろく、
わたし達はこの世を取り——
違えるのか、

緑の麻布を
開いたドアと遅まきに間違えることか。
しかし、今でさえ、
新しい氷のように
正確な小さな精霊は
常緑樹のやさしい枝によじ登り、

肘や
ひざに
香が擦られてつき、
目は聖なる挑戦の色をたたえ、

よく見ようとし、
反対側には、

抽象的な枝をちょうど過ぎたあたりに、
何かまったき全体的なものが
一人であるとうそぶいていて
彼女の静止を緩めるのだ。